

コメント

青木 美智男

本日、開会の挨拶で申し上げましたように、私は外国史の研究者ではありません。日本、江戸時代後期の文化を研究している者です。ですから、本日、4人の方々のお話を聞きまして、これから私がコメントすることは、間違っているかも知れませんが、その辺りのところはお許し下さい。

私は、このフランス革命と日本・アジアの近代化という問題の仕事が始まる時、最初の年は公開講座が12月にありましたが、そこで「フランス革命情報と日本」という題で、フランス革命の情報が日本にどういう風に伝わってきているのかということ、18世紀の末から19世紀の半ばにかけて、お話させていただきました。実は今、それをベースにして、この仕事のまとめとして『フランス革命と日本の近代化』という研究成果を執筆しているところでございます。その点で、今日の井田さんのお話は、私にとって大変刺激的でした。

井田さんの本日の御報告は、近代フランスの情報を、御専門の中江兆民の立場からとらえるどのように描けるかということ、非常に具体的に示されたと言ってよいと思います。つまり兆民が最初にフランスをどういう風にして知ったのか、どんな情報をどこから得たのか、どのようにフランスのことを知ってゆこうとしたのかということを通して、同世代の青年たちもおそらく一般的にこうであろうという、その情報源を紹介してお話されたと思うのです。それは基本的には、中国でアヘン戦争以降の危機感の中で生まれた、世界の情報を集めた『海国図志』などを読むことから吸収したのではないかと。そしてそれが最終的に自ら欧米に向いて行った福沢諭吉の『西洋事情』などを通して、さらに大きく変わって来るのだという、こういう話をされたものだと思うのです。私が、その点にあえて付け加えるとすれば、鎖国日本への海外情報というのは、中国から「漢訳西書」とか「漢訳洋書」といわれているように中国経由で入ってくることもかなりありますが、やはりオランダを通して、ヨーロッパの情報は早くから入ってきている点を見逃してはならないと思います。とりわけアヘン戦争以降、徳川幕府が危機感を感じて、オランダ商館に対して、『別段風説書』という詳細なその年その年の欧米や東南アジアの情報を提出するように命じ、オランダ商館はそれに応じて、かなり詳しいものを提出しています。ただこの中で間違いなく誤っているのは、「オランダはいつも静謐である」「平和である」ということだけで、他のと

ころはかなり事実に近いことが記されています。

そういう点でゆきますと、フランス革命後のナポレオン時代の動きが克明に日本に伝えられております。これを幕府が吸収する。全部絶対に表に出さないという原則になっているのですが、実は、決して幕府だけがその資料や情報を独占したわけではありません。間違いなく薩摩藩、肥後藩などの大藩には、長崎のオランダ通詞を通して、あるいは通詞を囲いこんで、そこで情報が入っています。ですから、ペリーがやってくる、来年やって来るということを、最初に知ったのは実は薩摩藩です。幕府にその『別段風説書』の日本語訳が到着する前に、薩摩藩などは知っていたように、かなり広まっていたことが分ります。それからもう一つは、とりわけ日本が開国し、和親条約の締結以降はオランダがますます力を失って、かわりにアメリカやイギリスやフランスがクローズアップされてくるわけです。そうすると、そういう関係のところからも情報が入ってきていますので、もう一つのフランスを知るルートが、実際にあったという風に考えるべきではないかと思ひます。ですから兆民が、長崎に行って吸収して、見てきたところ、もう一つのルートを考えた方が、私は適切ではないかという風に判断をしていますので、これからその辺のお話を伺ってみてはいかがかと思ひます。皆さんがよくご存じの『ペリリ提督日本遠征記』という有名な本がありますが、その中の一節にこういう文章があります。「ペリリ提督の来訪以前にはまだ見たこともなかったわが鉄道や電信、銀版写真、ペキサン大砲、汽船等についても、些か心得顔に語る事ができたし、又かくて彼らはヨーロッパ戦争についても、アメリカの革命、ワシントン及びボナバルトについても、賢明に話を交わす事ができたのである」と述べているように、かなりもう、世界の情報が入って来ている。それが、わずかですが一般のところにも流れてくる、といったことも考えてよいのではないかと思ひます。ですから、もう少し色々な知識を得ていたのではないかな、という考えです。その辺のところも是非お話していただきたいです。

それから、區さんの話ですが、私はこのように報告を聞かせていただきました。要するに、私たちはこれまで孫文らの運動に見られるように清朝打倒の方にばかり眼を向けてきましたが、そういう動きだけではなく、清朝をベースにした立憲君主制、つまり日本と同じような君主制の設立を模索していたのではないか。そういう点で、嚴復という方が書かれたこの書物を通して考えられることは、彼の君主制のベースになっている政治思想は、モンテスキューの『法の精神』であり、その『法の精神』におけるアジア観の支柱である風土論を超えて、独自の君主制論を打ち立てようとしたと區さんは言いたいのだろうと思ひます。そして専制というのは決して邪悪なものだけではなくて、凶悪的なものでもなく、嚴復はその基底に仁政があれば存在しうるものと主張していると言うわけです。つまりそういう方向に君主制を切り替えていって、それをベースにして新しい人民の幸せを考えるような国家、政治制度等を創造していくべきではないかと言うことが書かれていると言いたいのだと思ひます。嚴復の言うような道が、中国の近代の一つの選択にあった。それがフランス革命を含めたその前後の、モンテスキューの『法の精神』などの翻訳が入ってきて、そこから影響を受けた。その点で中国の近代化にとっても、フランスとの関係は非常に大きな意味を持っているし、フランス革命ともつながると區さんは論じられていると思ひます。しかもそれだけではなくて、それをベースにして中国において自ら新しい国家像の描き方

が生まれていた点に注目すべきだと述べられていたと思います。その点で問題は、このことがどこまで浸透したかということになります。こうした点を、今日の討論の中で區さんから聞きしたいと私は考えました。

それから權さんのお話ですが、これはちょうど、日清戦争後から日韓併合前後の話が今日のお話の中心になっていると思います。フランスを含めた欧米の情報は日本を經由して朝鮮にもたらされる場合もあるし、中国の「漢訳西書」からゆく場合もあります。つまり情報経由はさまざまありますが、朝鮮の人々はかなり積極的にヨーロッパ近代の国家の在り方というものについて関心を持ち、フランス革命についても分析する段階に至っていたと考える、そういうことが現実にあったといわれます。しかしそれが日韓併合で挫折し、多くの知識人たちが、そこで失望してしまったように見えたのですが、実際には、最後に權さんも、こうした思想が消え去ったのではなく、それは1919年の三・一独立運動の思想的底流になっているのではないかとこの点まで見通されて、これは今後の研究課題ですとおっしゃられました。まさに本日のお話はそこまで持っていくと、非常に大事な問題になるのではないかと私は判断しました。その辺の展望をお話したいければと思います。

最後の長谷川イザベルさんのお話ですが、私は大変ショックを受けつつ、私的なことを思い出しました。かつて私は福島県の山の中の小さな城下町で育ち肺結核にかかりました。結核はようやく治ったものの、自分の家の仕事が出来なくなりぶらぶらしていた時代の話です。その時に、私を指導してくれたのは、当時は戦災孤児を収容した学校、鐘のなる丘と同じ施設の先生です。先生は町内の青年のため、読書会をもっておりました。東大の理学部を出て、非常に容顔の優れた先生でしたので、たくさんの女の子が集まったのにひかれて私は参加したのですが、そこで私ははじめてフランスのレジスタンス運動の小説を読みました。イザベルさんのお話を聞いておまして、その時のことを思い出したのです。今日のお話ですと、基本的にフランスの女性が参政権、選挙権を得るのは、戦後であるということをお述べられました。それはフランス革命以来の女性たちのそういう様々な活動や運動の結果として最終的に生まれてきた成果であると結論づけられました。その点でいきますと、日本の女性の参政権は、やはり戦後ですから、その点で類似していると思います。その点をイザベルさんは日本の戦前の革新的な女性の活動家たちとフランス女性のフェミニズムの活動とを比較されているわけですが、最後に両大戦間の時期が非常に重要だという話をされておられました。私はその点をもっと深める視点が必要なのではないかと思います。つまりその話をうかがって、レジスタンス運動の中での女性の役割、女性が果たした歴史的役割が非常に大きかったのではないかと考えてならないのです。つまり当時フランスの女性が参政権を得る長い歴史の中で飛躍があるとすれば、レジスタンス期ではないかと思うのです。日本の女性は、その点から見れば、反戦運動をやるどころか、逆に戦争に協力して、銃後の母など翼賛の立場をとってきているわけですから、フランスと非常に違うのではないかと思うのです。ですから戦後同じく参政権を得たとしても、その後の戦後の日本の女性の解放運動とフランスの場合に違いが出てくるのではないかと思うのです。つまり日本の女性は自らの力で参政

権を得たわけではないことから、ボーヴォワールの『第二の性』に示された女性の生き方に非常に大きな影響をうけたのではないかと思うのです。それですからフランスのボーヴォワールの実存主義の影響力がベースになって、その後の日本のフェミニズム運動は出発せざるを得なかったと理解出来ないだろうかと私は感じました。そうしたことを、是非議論していただければ大変ありがたいと思います。

10分という制約で、それをちょっと超えましたけれども、これで私のお話を終わらせていただきたいと思います。